
L0051 とNo11 に仮想と竜を

鳥頭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L0051とN011に仮想と竜を

【Nコード】

N2687V

【作者名】

鳥頭

【あらすじ】

現代よりもほんの少しだけ未来の話。

世界は、情報化社会が進むことによつて現実にまで溢れだした仮想である、『竜』という存在に、その安全を脅かされていた。

人々の身を守るために、『竜』対策機関、通称『組織』が生まれ、研究の末、『組織』は人為的に超能力者を生み出す技術と、非現実的存在である仮想を攻撃する手段『リビングデバイス』を作り、日々『組織』は『竜』と戦い、世界をその危機から守っていた。

これはさまざまな問題を抱えた超能力者達の物語である。

最初

「俺には何も期待しないでくれ。話は以上だ」

数年間にわたる調整と訓練の末、配属された部隊の顔合わせ。私の目の前に立つ、この部隊の隊長であるはずの、整った、しかし苦虫を噛みしめたような顔をした男は、唐突にそんなふぬけたことを抜かした。

『組織』の本部、その地下にある小広間。普段は作戦行動前のブリーフィング、訓練の際には座学にも使用されるそこからは、机や椅子の類が綺麗に撤去されていた。しかし、そのせいで室内が広くなるかと言えばそうでもなく、代わりに詰め込まれ、そんな中でも整列した第十一分隊の隊員たちによつて、むしろ窮屈と言えるほどに息苦しく感じられるまでの密集地帯となっている。

私、製造番号L0051はそんな密集地帯の最前列で、その発言に呆気にとられ、目の前に立つ苦々しげな顔をした男を眺めていた。本当にそれだけ言い残して部屋から立ち去る男に、私と同じく最前列に並び、取り残された新隊員たちは横一列のままそれぞれに顔を見合わせる。

「……どういうこと？」

「……さあ」

一応は顔合わせであり、公的なものであるからあからさまな私語は出来ない。極限まで押し殺した声で、視線は前に向けたまま同じ境遇にある隣人に声をかけたが、やはり向こうも困惑したような声を返すのみだった。

ここに集合させられて、部隊長補佐官だという上官に顔合わせをやることを伝えられたのがついさつき。始めの挨拶として補佐官から押されるようにして男が前に出てきたので、てっきり訓示か何かを垂れるものだとばかり思っていたのだが。

そんな風にざわめく新入り達を横目に、先ほどまで男の横に立つ

ていた隊長補佐官の女は、その冷めた美貌に呆れの色を濃く滲ませて私たちに告げた。

「えー、というわけで部隊長からのお話は以上です。次は私たちの部隊が主に任務として行うことを……」

そのまま何事もなかったかのように話を続けようとするので、皆ひとまず口を噤む。だが、それで胸の内の疑問が消えるはずもない。男の真意が理解できない。新隊員を試す訓練か、もしくは試験のようなものなのかとも思ったが、そんな色もなく、淡々と話は進んでいく。

よくよく観察してみれば、後ろに控える部隊の先輩方も補佐官と同じく動揺の色もなく、少しばかり疲れたような影を浮かべて起立しているだけであった。

「……そこっ！ よそ見をするな！」

鋭く刺さるような補佐官の咎める声。弛んでいた空気が一気に引き締まる。後ろを盗み見ていたことがばれたようで、私はびくりと体を震わせると反射的に直立して向き直り謝罪した。

「申し訳ありません！」

補佐官は数秒間じつと私を睨みつける。入隊早々上官からの心証を悪くしたくはないし、そもそも後ろを向いていた自分が悪いのだから、微動だにせずにつまっすぐその視線を受け留める。補佐官はしばらくそのままだったが、やがて仕方ないとも言いたげな様子で浅くため息を吐いた。

「……次はありませんよ？」

「はっ！」

「では、次は隊内の規則についてです……」

そして、うんざりとしていることを取り繕おうとしたような、奇妙なしかめっ面で話を再開する。

一回注意を食らっている以上、もう不真面目なところを晒すことはできない。私は全力で話に耳を傾けつつ、意識はどうしてもあの男にことを考えてしまっていた。

別に、私だって任務にそこまでの熱意があるわけではない。

所詮は『組織』に作られた身の上。喜んで任務に就いているような者もいれば、逆らうことができないから嫌々従っている者もいる。それぞれに事情があることは知っていた。あの男を見かけたことすら初めてだし、私があつた男について知っている情報なんて、あの男が『組織』のNo.1であることと私の所属する部隊の隊長、つまりは上官であることくらい。

私にはわからないだけで、部隊の先輩方の反応を見ればそうではないだろうと思うのだが、何か深い思惑や事情があるのかもしれない。

けれど、私たちは世界を危機から救うために在るのだから。

世界なんてほんの欠片しか見たことはないけれど、あの態度はあまりに不誠実ではないのか。

個々にそれぞれ事情があることは重々承知しているが、何よりも、男はこの基地でも有数の実力者であるのだから、それは尚更だろう。

少なくとも、ああいう態度が、私は嫌いだ。

そう考えると、なぜだか無性に苛々してきたので、私は一瞬目を閉じて息をつき、すぐに目を見開いて気持ち切り替える。

あの男について何かを考えても意味がない。あの男が一体どういう人間なのか、なんて、その結果がどうであろうと私には行動の起こしようがないのだから、何の関係もないのだ。

それに、何か複雑な事情があるのかもしれないではないか。

……まあ、それで私のあの男に対する評価が変わると思えないけど。

私は男が消えた出入り口に冷たい目を一度注いでから、すぐに補佐官に向き直る。

これが、私と、No.1の男との出会いだつた。

一話

降り注ぐ漆黒。

弾丸よりは遅いそれを、私は身を擦って避ける。

ドン、という音と共に地面に着弾。振り返ってみれば、それは地面に半分ほどめり込む直径五センチ程度の鉄球だった。

「よそ見すんなあ！」

鼓膜を揺らす声。まずいと気付いた時には、既に対戦相手は私まであと二歩の距離にまで迫って来ていた。走ってきた勢いのまま大振りに引き絞られた拳には、鈍く輝く黒金がグローブのように装着されている。

かわすには体勢があまりに不安定。しかし、敢えて受けるにしては相手の一撃の威力はあまりに凶悪。反射的に、私は左腕を逆袈裟切りの形で振り上げる。

「弾けるお！」

その言葉と同時。あと一歩というところまで追い詰めた相手と、私のちよつど真ん中の空間が、破裂した。

「うおっ!？」

握り拳程度の小さな爆発。白熱電球並みの光量に、音も爆竹程度。しかし、目くらましには十分だったようだ。相手は驚いたような声を上げ、大きく飛び退った。その隙に私も大きく後退し体勢を整える。

場所は第三訓練所。

床は硬く固められた土。灰色の壁に囲まれたバスケットコートくらしい殺風景な空間で、私は今回の訓練の相手である部隊の先輩と、十歩ほどの距離で向かい合っていた。

私と同じ、全身をびつちりと包む黒の戦闘用のスーツを纏った、二メートル近い肢体。その隅々にまで意識が張り巡らされていて、隙など欠片もない。極めつけに、そのいかつい顔にふさわしい鋭い

眼は、肉食獣が獲物を狙うようなギラギラとした輝きに満ちていた。勝てるわけがない。

怯え、下がりそうになる足を無理やり押さえつけ、睨み返す。姿勢を少しでも崩せば、それが致命的な隙になる。それが分かっていたからこそ、虚勢だろうが耐えるしかなかった。

今回の戦闘訓練、私に課せられたルールは『制限時間が切れるまでやられない』こと。

最初聞いた時は舐められたものだと思ったが、実際に戦ってその難易度の高さを痛感した。この狭さでは逃げることも満足に出来やしない。

「なんだ、ギブアップか？」

対戦相手、確かオースと呼ばれていたか、が小馬鹿にするような笑みを浮かべ、尋ねてくる。

「うるさい。ただでさえむさくるしいんだから、態度くらいクールに振る舞ったら？」

鬱陶しかったので、毒づきやり返す。その間も頭はフル稼働で、対策を考え続けていた。

オースはそんな私の様子を見て、にやりと笑う。

「ほお、仮にも部隊の先輩にそんな口を叩くのか。後でお仕置きしてやらないとな？」

悪戯っぽく、楽しげに語るのを見て、内心だけで舌打ちする。

少しでも怒ってくれればまだチャンスがあったのに、するりと流されてしまった。流石に場数が違う。

「セクハラで訴えるわよ」

「おお、怖い怖い」

まだ、この状況を打破する為の策は浮かんでいない。

私の打てる最上の手は、会話を引き延ばす時間稼ぎ。脳みそを回転させつつ、私は口を開く。

「ふん。あんまり怖がってるように見えないけど？ 格下なんて怖がる必要もないってことなのかしら」

「そんなことはないさ。少なくとも、俺は戦ってる相手を侮ったりしない。だからな……」

目では相手を窺いつつの、口先と表情だけでの軽口の応酬。次の言葉を紡ごうとするまでのほんの一瞬。

オースが、野獣のように、笑った。

「行くぞ！」

ダン！ と地面を蹴る音が、火薬の炸裂のように胸に響く。

飛び出してくるオースに気圧され、ほんの一瞬硬直。しかし、油断していたわけではなかったから、私は真正面から飛び込んでくるオースに合わせ、今度は無言で横薙ぎに腕を振る。

私の超能力は『爆発』。

この能力を使えば、任意の場所に爆発を発生させることができる。範囲の自由度が高すぎるので、位置情報を入力する為に一々腕を振らなくてはいけない。また、その威力も、体を鍛えた相手を一撃で戦闘不能に追い込むには不足していた。

しかし、不意さえ突けば、爆発で三半規管をいかれさせることもできる。

だから、私は突っ込んでくるオースの正面、ではなく、その頭の横で『爆発』を使う！

が。

「しゃらくせえ！」

それは、唐突にオースの頭部を覆うようにして出現した、鈍い黒の光沢を放つ鉄仮面に防がれた。

ダメージはゼロではないのだろう、僅かにオースの体が傾ぐ。しかし、その勢いは止まらない。

対して、私は能力を使ったことで、体勢が崩れてしまっていた。これで決まると油断していたせいだ。せめて、オースが飛び込んで来た瞬間の硬直がなければ、反撃に転じることも出来たろう。

しかし、

「終わりだ」

既に射程距離に入ってしまったオースは、鉄に覆われていない拳を横に振り抜く。

それに反応することもできず、拳は吸い込まれるように側頭部を直撃し、私の意識を奪う。

気を失う直前。にやりと、鉄仮面の奥でオースが笑ったのが、不思議と理解できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687v/>

L0051とNo11に仮想と竜を

2011年8月7日03時31分発行